

—デザイン力の大切さ—

2010年を迎えました。皆様もご健勝のこととお慶び申し上げます。

昨年文科省に申請いたしました本学4年制教職課程設置の認可は現在待機中ではありますが、認可内定を受けましたら、できるだけ早急に皆様にご連絡申し上げます。よろしくお願い申し上げます。

さて、教育にはデザインが必要です。全体を俯瞰し、様々な課題を整理して考え、どのような構想でどのように着手していくのかをはっきりさせておかないと、やみくもにエネルギーを使うだけで成果が得られず、徒労感だけが残ります。

本学の設置予定の教職課程では、「授業デザイン力」の育成に重点を置いています。これには「考える力」が必要です。ある現象があれば、その要因となる背景や直接的な原因がどうからんで、そのような結果を生み出しているのかを考え、何がその対処に当たって効果的であるのかを考察し、その対処方法を具体的に工夫していく必要があります。こうした、全体構造を論理的に把握し、それをわかりやすく生徒に説明し、学ぶ生徒がなるほどと思って学習できるようにする指導力、これが教員に求められる「考える力」でしょう。

たとえば、本学でも入学時の学生にテキストを読ませたり、英語で対話をしたりすると、一語一語を区切ってゆっくりと、しかもその発音はカタカナ英語で言葉が返ってきます。コミュニケーションが大切とされていますが、こうしたたどたどしさで、中身のある対話ができるのだろうかと思います。

この1月5日の朝日新聞朝刊3面に、来日35年のブロードキャスターの英国人ピーター・バラカン(Peter Barakan)さんとのインタビュー記事「2010年代 どんな時代に ■国際化と日本」が掲載されていて、その中で、バラカンさんは、「内向きなカタカナ英語」について所見を述べておられました。「僕の番組に出演する日本人ゲストが話す英語が文法的に正しくても発音が極端に分かりづらかったり、英語のカタカナ表記が間違ったりしていることが多い。たとえば『マネー(金)』は『マニ』、『モンキー(サル)』は『マンキ』と書くのが実際の発音に近い。日本が会話よりも文字で西洋文明を吸収してきたのは事実だし、カタカナがそれに貢献したのも理解する。それならもっと近い表記に柔軟にすぐに変えればいい。だけど、もっと気になるのが、

僕が間違いを指摘しても、『日本ではこれで通じるから』と軽くいなされること。特に固有名詞の発音には無頓着だ。...(中略)...『日本人同士でわかるのだから、間違っどころが悪い』という論理は少し高慢でないかとすら思う。つまり英語が世界とコミュニケーションをとる言葉でなく、日本人の内輪の世界でしか通用しない記号と化している。...後略...」とありました。

その昔、Americanを「メリケン」としていた時は、聞こえたとおりにカタカナ表記していたのでしよう。それが、時代とともに「アメリカン」となってしまうました。単語ひとつを覚えるときにも、このカタカナ英語的な音声日本人学習者にはどうもついて回るようです。日本人学生の英文朗読のまずさの根本的な原因はここにあるように思えます。学習者には、語彙力がスペルという呪縛を第一とした単語暗記になっていて、ことばとして発音できることより、そのスペルやルールにばかり気が向いているようです。こうなると聞き取りにまで影響します。

「英語が聞き取れない」理由には様々なものが考えられます。

1. 英語を正しい音声で覚えていない。
2. 速度についていけない
3. 語彙不足
4. 英語のリダクションに慣れていない
5. 背景的知識が不足している

この中の、1の「英語を正しい音声で覚えていない」が根本的な課題ではないでしょうか。英語が聞き取れるということは、まず何よりも頭の中に記憶されている英語の音声と耳で聞く英語の音声一致していることです。それは、人間の脳は記憶したとおりに判断するからです。だから、個々の単語の発音を適当に覚えるのではなく、しっかり発音して正しく記憶しておくことがとても大切なこととなります。ですから、単語力・語彙力をつけるにはスペルだけを注意するのではなく、聞き取りにつながるようしっかりと発音力をつけることが授業デザインに望まれるということがわかつています。

音声理解を目的・目標とする授業デザインには、「発音力」が「英語の楽しさの(再)発見」「リスニング力のアップ」「単語力のアップ」「英語の感性の磨き」につながるという理念を押しえた言語活動や学習活動をデザインすることが必要になります。

授業デザインとは学ぶよろこびを抱かせ生徒を幸せにすることです。ともに、授業デザイン力を考えていきましょう。